

西隆寺の調査

—第320・324次

1 はじめに

西隆寺は、平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪を占める尼寺で、称徳天皇の意向により、神護景雲元年(767)に造営が開始され、宝亀2年(771)頃には完成していたものと考えられている。宝亀9年(778)には、皇太子山部親王の病氣平癒の誦経が、東大寺、西大寺と並んで行われており、当時の格の高さがうかがえる。その後、10世紀頃まで存続したようだが、鎌倉時代にはすでに廃絶していたことが、記録に見える。

西隆寺の本格的な発掘調査は1971年から始まった。これまで、寺域東半は開発に伴う事前調査が進んでおり、金堂、回廊などの中心伽藍のほか、東門、塔、食堂と推定される遺構も確認している。その一方で、寺域西半については、これまで、ほとんど調査がおこなわれていなかった(図150)。

今回の調査は、店舗建設に伴う事前調査として、寺域西南部にあたる十五坪のほぼ中央部分に、南北2つの調査区を設けた。南側(第320次)は回廊外側の南西約300㎡を、2000年11月14日から2001年1月29日まで、北側(第324次)は西面回廊と南面回廊のコーナー部分を含む501㎡を、2000年12月12日から2001年3月27日まで調査した。以下、それぞれの調査概要を説明する。

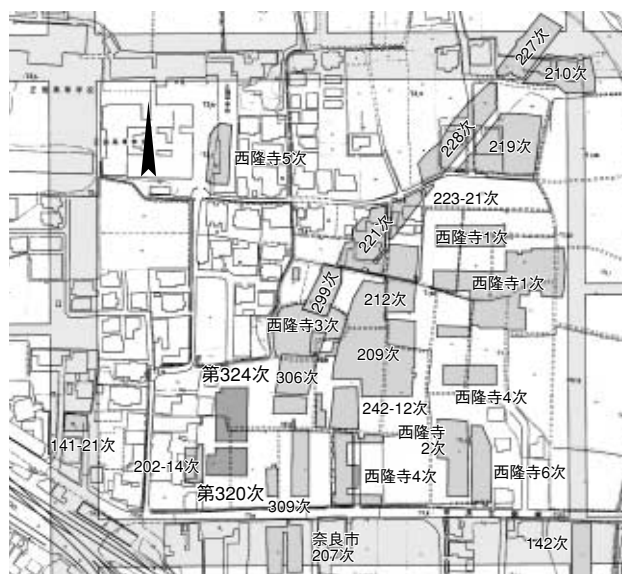


図150 第320次・324次調査区位置図(左:過去の調査区との関係、右:復原伽藍における位置) 1:4000

2 第320次調査

遺構の状況

約0.7mの客土下に、暗灰色の旧耕土、灰褐色の床土があり、遺構検出は、茶灰色砂質土(標高71.25m付近)と、下層の橙褐～灰褐色粘質土の地山面(標高71.10m付近)の2層に分けて行った。前者で検出した遺構を上層遺構、後者を下層遺構とよび、以下、各層で検出した主要な遺構を説明する(図151)。

下層遺構は、大小の土坑、井戸、溝が密集する。残存状態から、上面が大きく削平されたことは明らかである。出土遺物、出土木材の年代等から西隆寺造営以前に遡る。上層遺構は、時期不明の小土坑や耕作溝を除けばSX850のみに限られ、西隆寺期と考えておく。

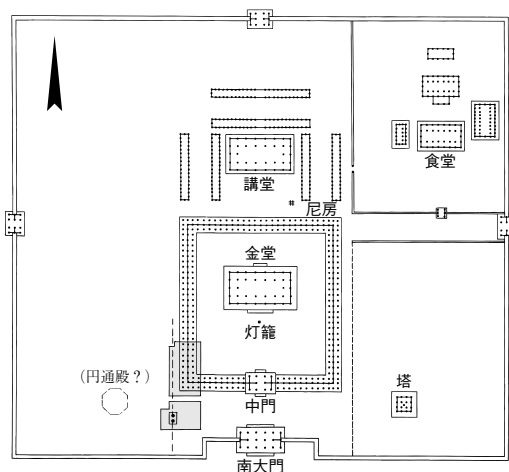
＜下層遺構(西隆寺造営以前)＞

SD851 調査区西北辺にある幅約0.3mの斜行溝で、SE880(後述)と重複し、SD851の方が古い

SE855・860・865 調査区中央南辺で、3基の重複した井戸を検出した。ほぼ同じ位置で、SE855→860→865の順に掘り直したものとみられ、いずれも深さ1.7m程度残存していた。

SE855は、井戸枠抜取穴の西半分を発掘した。抜取穴の径は1.5mで、出土遺物はごく僅かである。

SE860は、一辺50cmの正方形平面をもつ横板組井戸枠の最下段が、一部、原位置から西にずれて出土した。板



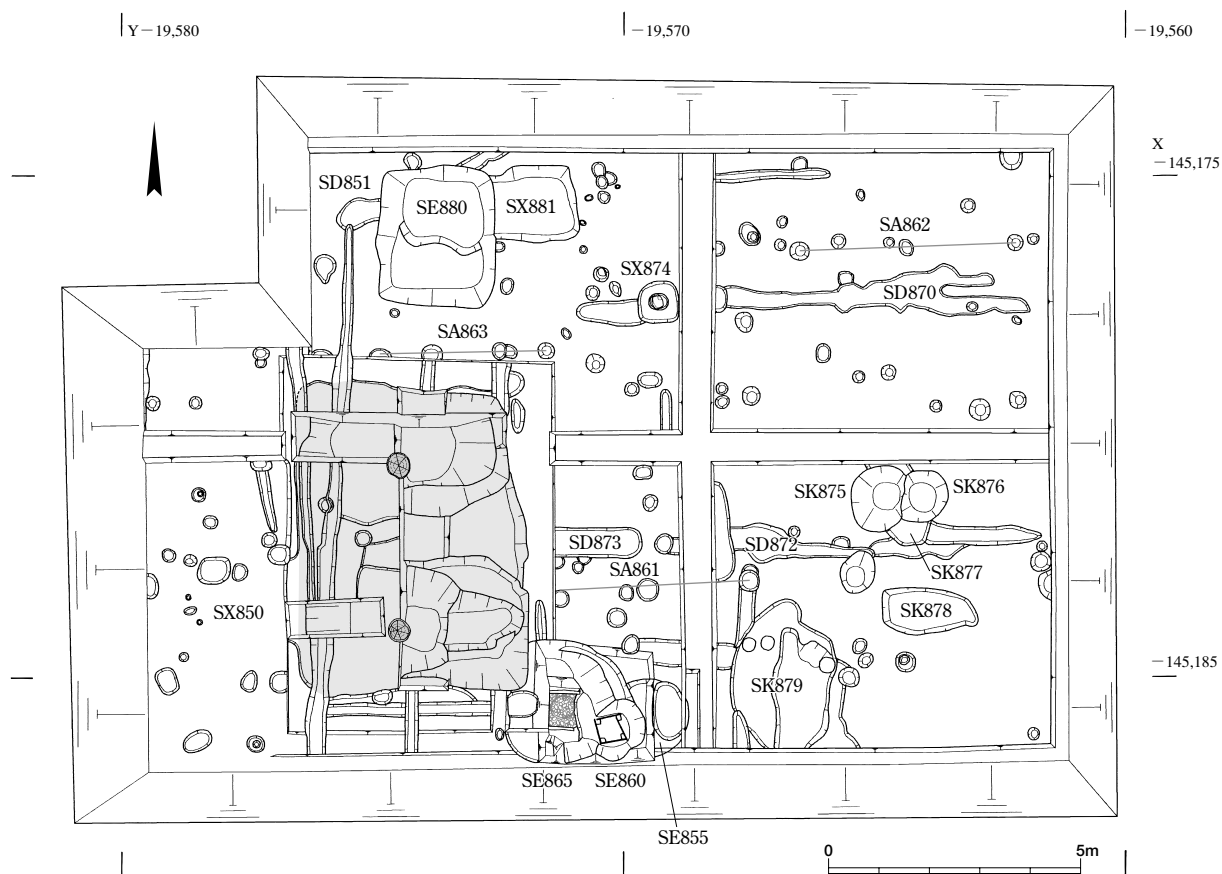


図151 第320次調査遺構平面図 1:150

材4枚を木口同士が接するように横位に立て、四隅の内側に接して、約10cm角の支え柱痕跡が残る。

SE865は、井戸枳抜取穴中より井戸枳材が多量に出土した。また、最下部には、水湧かし用の曲物（径44cm、厚さ0.7cm）が原位置のまま残存し、底には径2～3cm程度の小礫を敷き詰め、その周囲を、半裁した丸太の先端に切り欠きを作り、ほぞ組みした枳材で区切っていた（図152）。東側の枳材は抜き取られていたが、四方を同様な枳材で囲んでいたことは間違いない。南北枳材の間隔は77cmである。また、年輪年代測定により、抜取穴中から出土した檜井戸枳材の1点は731年伐採であることが判明し、同じく抜取穴中より軒丸瓦6230Ab（瓦Ⅲ期前半）が出土した。

SA861・862・863 いずれも東西方向に並ぶ小土坑列だが、掘形を持つものではなく、杭を使った簡単な構造の塀か柵であろう。SA861は1.8m間隔で2間分、SA862は2.1m間隔で2間分、SA863は約1.1m間隔で3間分検出した。

SD870・871・872・873 調査区中央のやや北寄りと南寄りにある東西溝で、SD871・872・873は一連のものであろう。溝の幅は、北側のSD870、南側のSD871・872・873ともにばらつきがあるが、平均して0.6mで、いずれも深さ3～5cmを残して大きく削平されている。このことから、SD872が南北畦附近で一旦と

ぎれ、西側で再び現れている（SD873）ものと判断した。この2条の東西溝は、心々距離約4.8m（16尺）で並行し、残存状況も非常によく似ているため、幅約4.2m（14尺）の条坊内東西道路を挟んだ側溝である可能性が



図152 SE865検出状況（北東より）

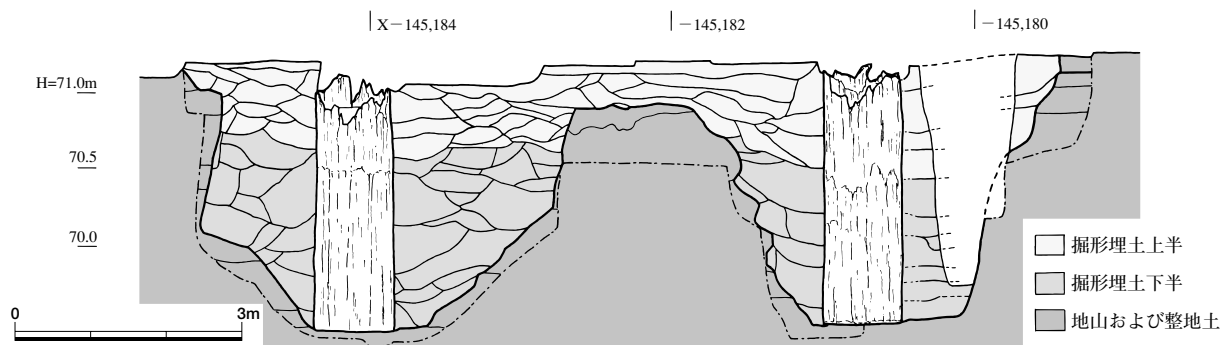


図153 SX850断面図 (Y=-19,574.5) 1:50

高い。この場合、道路心はX=-145,179.8前後となる。

SX874 調査区中央やや北寄りにある掘立柱柱穴で、SD870と重複し、こちらが新しい。柱穴底に径26cmの礎盤石が残り、その上面まで大きく削平されていた。これと組み合う柱穴は、完全に削平されて消滅したものと考えられる。

SK875・876・877 調査区中央東寄りにある一連の円形廃棄土坑である。SK877は非常に浅いが、SK875は径1.3m、深さ1.5m、SK876は径1.0m、深さ0.5mである。土坑中には鋳滓、轆羽口といった金属製作に関わる遺物の他、土師器等が大量に捨て込まれていた。これまでも、十五坪から多くの金属製作関連遺物が見つかっており、付近に金属製作に関わる施設の存在が推定されているが、これらも一連のものと考えてよい。

SK878 調査区南東にある径1.9m、深さ0.2mの楕円形土坑で、凝灰岩片、轆羽口が捨て込まれていた。

SK879 調査区中央南辺にある、幅3.0m、深さ0.2mの不整形土坑で、鋳滓が2点出土した。

SE880・SX881 調査区北西辺で重複する井戸と土坑で、SX881が古い。SX881は東西1.6m以上、南北1.4mの方形土坑で、深さは0.5mある。おそらく、井戸を掘りかけて途中でやめ、すぐ西にSE880を掘り直したのであろう。SE880は、東西2.4m、南北2.7mの方形井戸で、深さは1.4mである。井戸枠は抜き取られ、石や木

材片が捨て込まれていた。

<上層遺構（西隆寺期）>

SX850 調査区南西辺にある、巨大な掘立柱遺構である。掘形は、南北中軸線上で約5.9m、東西4.1～4.3mのやや不整形な隅丸長方形で、最も深い部分で約1.8m残存していた。掘形は、上半と下半で形状や埋土の特徴が異なる（図153）。上半は、約0.3mの深さまで掘形全体を掘り込む。ここで、中央に掘り残し部分を作り、下半は、東西に長い2基の楕円形土坑（南北2.4m、東西約4.0m）を南北に分けて掘る。上半は、粘土やしまりの良い細砂を10～15cmの細かい単位で積むが、下半は、粘土ブロック混じりの粗い砂で埋めている。

掘形の南北中軸線上に2本の柱根が残っていた。柱の径はいずれも約54cm（1尺8寸）で、残存長は約1.7m、柱の間隔は、心々で3.25m（11尺）である。柱は、掘形下半のほぼ中央で、粘土質の安定した地山上に据えられていた。柱の下半は残存状態がよく、工具で粗く面取りして、表面を火で焦がしている。樹種はヒノキである。

出土遺物

瓦磚類 調査区内から出土した瓦磚類は少量で、軒瓦はいずれも、西隆寺造営以前のものである（表18）。瓦磚類の出土状況からみる限り、西隆寺の時期には、ここに瓦葺施設が存在しなかった可能性が高い。（清野孝之）

土器 須恵器、土師器が出土した。ここではのこりのよいSK875～877出土須恵器について述べる（図154）。

(1)・(2)は須恵器杯Bである。(1)は高台と身の間にケズリによる平坦面を有する。SK875出土。(2)は底部が高台よりも下方に突出している。SK877出土。(3)は鉢Aである。色調は灰色であるが、外面上半は炭素を吸

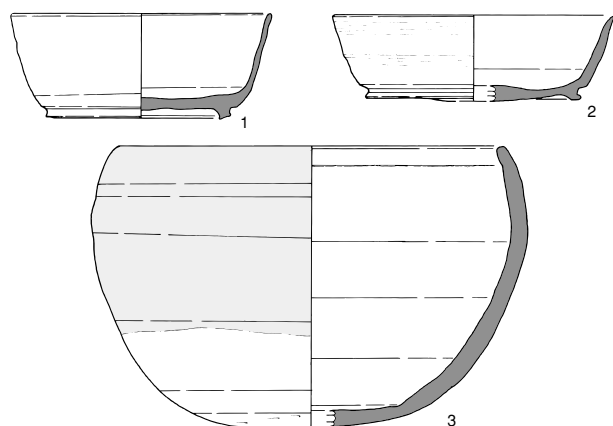


図154 SX875～877出土土器 1:4

表18 第320次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型 式	種	点数	型 式	種	点数
6320	Ab	1	6664	?	1
丸瓦		平瓦	磚他		道具瓦他
重量	15.1kg	39.3kg	1.4kg	1.5kg	
点数	105	388	2	13	

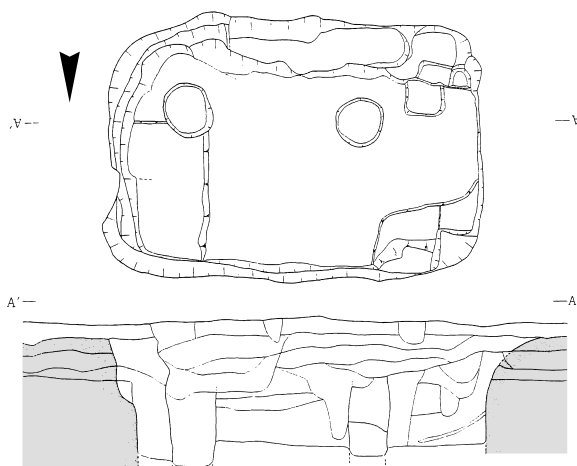


図155 下野薬師寺幢竿支柱遺構 1:100

着し、黒灰色を呈する。各土坑の資料が接合した。いずれも平城Ⅱの段階と考えられる。(金田明大)

金属製品・石製品・木製品 金属製作関連遺物として、鉾滓27点以上、轆羽口13点や、木炭、焼土が出土したが、金属製品は、鉄片、鉄釘各1点と少ない。石製品は砥石が5点、木製品は、SE860・865より井戸枠部材と見られる板材や木片が多量に出土した。

SX850の性格

SX850は、① 大きく深い掘形をもち、② 上半と下半で掘形の形状と埋土の様相が異なり、③ 径約54cmの巨大な木柱を2本立てる、という3つの特徴をもつ、極めて特殊な遺構である。これと類似した特徴をもつ遺構に、幢竿支柱がある。また、構造や位置関係から、掘立柱の門と推定することもできる。現状ではどちらも決めたいが、以下にそれぞれの根拠と問題点を示す。

幢竿支柱案 幢竿とは、儀式用の幢や旗を先につけた竿のことで、これを地面に立てるための支柱を幢竿支柱と呼ぶ。絵画や文献でその存在が知られ、寺院・宮殿跡に幢竿遺構の検出例がある。幢竿遺構の分類は、福田信夫により試みられており(『武蔵国分尼寺跡Ⅰ 平成4年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会、1994)、これに従えば、1つの掘形に2本の支柱を収めるSX850は、C類に該当する。同じC類に分類される栃木県南河内町下野薬師寺例(図155、『下野国分寺跡Ⅳ』考古学研究室報告乙種第12冊 国士舘大学文学部、1996)は、大きく深い掘形を持ち、太い柱を立てていたことが推定されるなど、上記①、③の特徴に合う。

ところが、幢竿遺構は支柱を東西に並べることが原則で、南北に並ぶのは、愛知県豊橋市市道遺跡例(『市道遺跡Ⅱ』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第40集、豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1997)ぐらいである。加えて、上記②のような掘形の特徴を持つものも見られず、かなり特殊な例になることは間違いない。掘形の地下構造はともかく、支柱の並びを整合的に説明する必要がある。

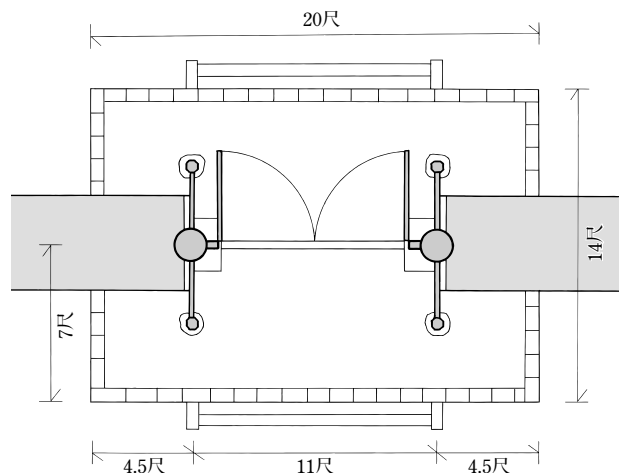


図156 SX850四脚門案復原図 1:100 (浅川滋男による)

幢竿が南北方向でなく、東西方向を正面としていたと解すれば、支柱の並びが南北になることもありえるだろう。しかし、その場合、幢竿が何を荘厳していたかが問題となり、対称位置となる回廊外側東南を調査していない現状では、判断しがたい。

門案 門とすれば、SX850の3つの特徴を整合的に説明できる。掘形の特徴は、下半を通常の掘立柱掘形、上半を基壇積土とみれば、特に東西方向の揺れを防ぐために深い掘形が必要だったと理解できる。掘形の平面形も、基壇上に礎石立ちの控え柱を持つ四脚門を推定すれば矛盾はなく、柱の太さから見ても、棟門よりは格の高い四脚門と考えた方がよい。この場合、柱間3.25m(11尺)、軒の出2.1m(7尺)、けらばの出1.35m(4.5尺)となる。門に取り付く南北塀は、削平されると痕跡がのこりにくい築地塀で、門の屋根は檜皮葺、築地塀は上土などの瓦を用いない構造がその候補となる(図156)。

ところで、この位置に門と南北塀を推定すると、その西側にある施設を区画する塀と、そこに開く門と解するのが自然であろう。西大寺に現存する『西大寺伽藍絵図』には西隆寺の伽藍も描かれており、少なくともその中心施設の位置関係は、信用できるものであると指摘されてきた。この絵図を見ると、西隆寺の西南隅に「円通殿」という施設が存在している。今回の調査区はちょうどその東側に当たり、円通殿を含む子院を区画する塀および、その東門と想定することが可能となる(図150右)。

この案の問題点は、SX850に類似した地下構造を持つ門の検出例も、現存例もないため、比較対象を欠くことである。また、南北塀がそのまま北に延びるとすれば、西面回廊棟通りの西7.4mを並行することになり、当然、北側の第324次調査区内を通るのだが、その痕跡は全く検出されなかった。この調査区では、回廊基壇の下部が残存していたが、その一方で、すぐ西側を並行するはずの築地塀は、雨落溝を含め、何の痕跡も残さず完全に削平されたことになる。(清野孝之)

3 第324次調査

基本層序は、上から盛土、耕土、床土、茶灰色砂質土、地山である。茶灰色砂質土は奈良時代後期の遺物を含む整地土で、遺構はこの整地土上または地山上で検出した(図158)。なお、本調査区は建物の地下部分にあたり遺構の保存が望めないため、最終的に全面で地山面まで掘り下げた。地山は北東がやや高く、西・南に低い。

主な検出遺構

<西隆寺期以前の遺構>

SK900 長径約2.5m、深さ0.3mの不整形土坑。無遺物。

SD901 幅約0.4m、深さ0.3mの斜行溝。北で西に約38度振れる。灰色砂が堆積し、遺物は含まない。

SX902 地山面で検出した柱穴および土坑群。SK903には直径17cm、心去り材の柱根が残る。外皮の残らない心材型で、年輪年代測定により、残存最外年輪の年代は25A.D.と判明した。弥生時代の遺構の可能性がある。

SD904 地山上で検出した素掘りの溝。幅約1m、深さ0.1m。東南部で向きを変え、SD901の埋土を切る。

SK905 地山上で検出した土坑。南北約3m、東西約1.5m、深いところで約0.3m。古墳時代の土器が多く出土し、SD901の埋土を切る。古墳時代の遺構。

SK906 径約1mの土坑。3～4世紀前半の布留式土器出土。

SK907 径約1mの土坑。SK908と同じ土が入る。

SK908 地山上で検出した土坑。幅1.4m、深さ0.1mで2m分を検出。古墳時代の布留式土器甕出土。

<西隆寺造営以前の奈良時代の遺構>

SK909 炭の入る長径1.8mの円形土坑。鑄造、鍛冶関連の遺構か。周辺部にも炭混じりの土が分布。

SK910 整地土上で検出した大型の土坑。南北5m、東西3m、深さ0.3m、平城Ⅲ・Ⅳの土器が入る。

SK911 整地土とSD913埋土に穴を穿ち、土師器の甕を埋納した土器埋納遺構。南面回廊の基壇下にあたる。

SK912 土器埋納遺構。地山上で検出。

SD913 西半部が整地に覆われる、素掘り東西溝。幅0.5m、深さ0.3m。

SD914～920 整地土上で検出した素掘りの溝。埋土中に平城Ⅳまでの土器を含む。西隆寺造営中の仮設的なものであろう。

<西隆寺期の遺構>

SC920・SC650 金堂を取り囲む複廊形式の回廊の西南部を検出した。西面回廊SC920は調査区北壁で確認できる柱穴と、回廊西南隅部の2間分を含め、9間分である。また、南面回廊SC650は隅2間分を含め、3間分である。ともに桁行10尺(約3m)、梁間8尺(約2.4m)で、隅2間分は桁行、梁間とも8尺である。

柱掘形は約1mの隅丸方形で、検出面から0.4m程残る部分もある。礎石そのものは残存しないが、根石やその抜取穴も一部で検出した。柱掘形の中には底近くに瓦片を敷き詰めて地盤を強固にしたものが見られた。西側柱南端の柱掘形からは、西隆寺造営終盤期とされる軒丸瓦6237B型式が出土している。なお、棟通りの柱筋の柱掘形は、側柱のそれに比べるとやや小振りで、残存するものも少なかった。

SX921 西面回廊の東辺部では、約11mにわたって瓦がその端面を揃えて並び、2段あるいは3段積まれた部分が検出できた(図157)。これは基壇の外装(基壇化粧)の瓦積み部分の基底部が残ったものと考えられる。全体に外側に向かって10度以上の傾きをもっている。後世の影響か。基壇の出は5尺であり、梁間が8尺であるため、回廊基壇の幅は26尺(約7.7m)である。基壇土を構築し、その側面を削った上で、平瓦の凸面(裏面)を上にし、端部が見える向きで地面から直接積み上げ、裏込め土を入れて仕上げている。

瓦積み部分の瓦は1m単位で取り上げ、分析した。その結果、丸瓦より平瓦が多く用いられているが、一部で平瓦の2倍～3.5倍丸瓦を集中的に用いている部分もあることや、平瓦は西隆寺創建時より古い粘土紐巻き上げタイプの桶巻き造りのものが相当数見られることがわかった。丸瓦の集中するところは、部分的な改修などの要因が考えられよう。



図157 SX921検出状況(東より)

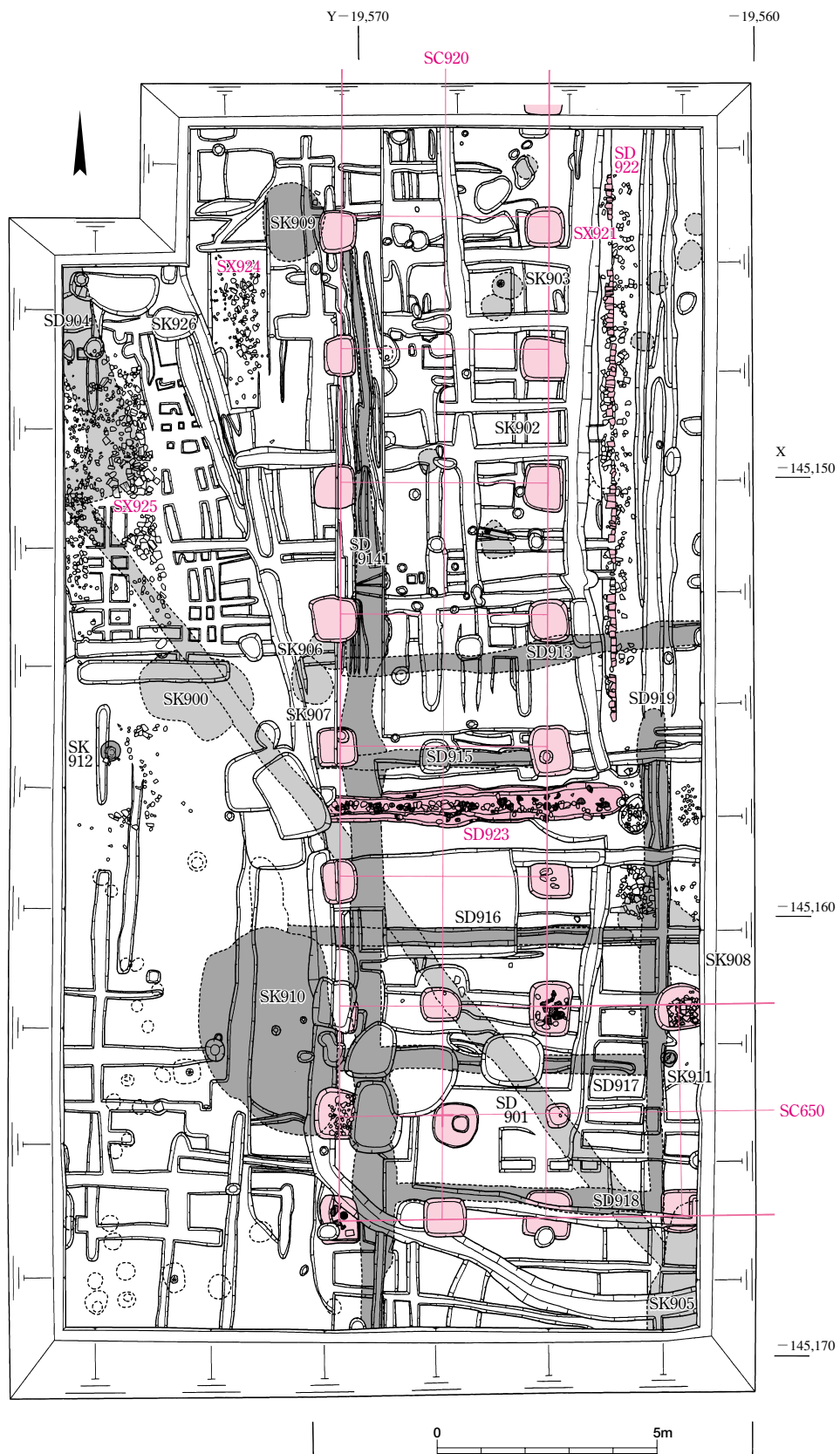


図158 第324次調査遺構平面図 1:150

SD922 西面回廊東側雨落溝。西肩は瓦積基壇の縁であるが、東肩が削平され、溝幅は確定しない。雨落溝上には瓦が散乱していた。これらの瓦をはずす段階で瓦の直下にはマンガン（Mn）が集積し、痕跡を残すことを確認した。溝底では10cm四方の痕跡が規則的に並び、平らに敷かれた瓦片の一部も検出したことから、溝底には瓦片を敷いていたことが窺える。

SX923 西面回廊の基壇の入隅から北へ2間目の中央を抜ける暗渠。幅約0.5m、深さ0.2mの掘形が残り、6.7m程検出した。西面回廊の東雨落溝を受けており、溝底は西側（回廊の外）に向かって傾斜し、石や磚、西隆寺造営終盤期とされる軒丸瓦6237B型式を敷く。蓋石は残らないが、一部に凝灰岩の側石が残る（図159）。

＜西隆寺期以後の遺構＞

SX924 瓦溜まり。西面回廊の西の雨落溝の位置にあたるが、攪乱を受けている。

SX925 大きめの瓦片が南北に堆積する瓦溜まり。第320次調査区のSX850の真北に位置し、門案を採れば門から続く南北塀に関わる遺構の可能性も考えられたが、後世の攪乱を受けている。

SK926 長径約1mの土坑。長頸鎌片出土。（内田和伸）



図159 SX923検出状況（東より）

出土遺物

瓦磚類 本調査で出土した瓦の総数は、17858点である。内訳は、軒丸瓦49点、軒平瓦34点、丸瓦3550点（総重量341.7kg）、平瓦14219点（総重量1289.0kg）、鬼瓦2点、熨斗瓦2点、隅切平瓦1点、刻印平瓦1点である（表18）。西隆寺創建期の軒瓦は25点で、創建以前のものは17点である。創建期の型式としては、軒丸瓦の6133N（5点）、6235C（2点）、6235I（1点）、6236F（8点）、6236種不明（3点）、6237B（1点）、軒平瓦の6761A（5点）の6型式が出土し、6236F・6133N・6761Aの出土数が比較的多い。創建期以前の型式としては、軒丸瓦の6143A（Ⅲ期後半）、6225（種不明、Ⅲ期）、6284C（Ⅰ期前半）、6307B（Ⅲ期前半）、6308B（Ⅱ期後半）、軒平瓦の6641C（藤原官式）、6655A（Ⅰ期後半）、6664C（Ⅰ期前半）・K（Ⅰ期後半）、6685C（Ⅱ期前半）、6691A（Ⅱ期後半）、6719A（Ⅲ期）の11型式12種が出土している。その数は6225・6691Aの各3点、6664Cの2点以外は各1点であり、特定の型式にかたよる傾向はない。また時期別に見た場合でも、藤原官式1点、Ⅰ期5点、Ⅱ期5点、Ⅲ期6点、Ⅳ期25点、不明1点となり、やはり創建時期の割合が高いが、それ以前の時期では特定の時期の遺物が多いという傾向は認められない。

なお、上記以外に、96点（総重量83.5g）の磚が出土しているが、その大部分は破片資料である。（渡辺丈彦）

表18 第324次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型 式	種	点数	型 式	種	点数
6133	N	5	6641	C	1
6143	A	1	6655	A	1
6225	?	3	6664	C	2
6235	C	2	6664	K	1
	I	1	6685	C	1
6236	F	8	6691	A	3
	?	3	6719	A	1
6237	B	1	6761	A	5
6284	C	1	型式不明		19
6307	B	1			
6308	B	1			
6316	Dc	1			
型式不明		21			
軒丸瓦計		49	軒平瓦計		34
丸 瓦	平 瓦	磚他	凝灰岩	道具瓦	
重量	341.7kg	1289.0kg	83.5kg	22.4kg	鬼瓦 2 刻印平瓦 1
点数	3550	14219	96	57	熨斗瓦 2 隅切平瓦 1

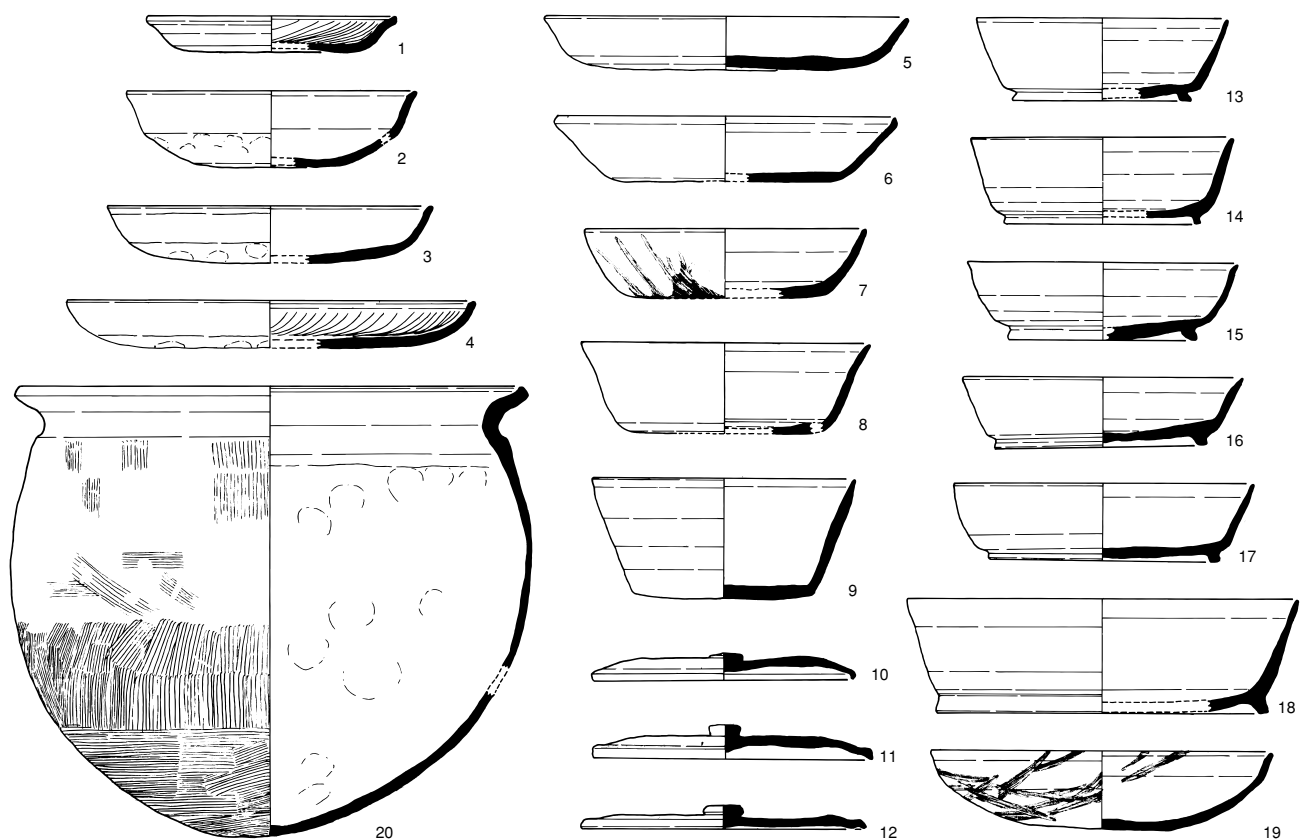


図160 第324次調査出土土器 1:4

出土土器・土製品 今回の調査では整理用コンテナにして約60箱の土器が出土している。そのなかには古墳時代前期、古代、中・近世、近代の土器、陶磁器があるが、大半は西隆寺回廊造営時の基盤土となった茶灰色砂質土層から出土した奈良時代の土師器と須恵器である。ここでは茶灰色砂質土層出土の土器のうち、供膳形態の器種を中心に図示した（図160）。

これらの土器の年代は、奈良時代後半に行われた西隆寺回廊造営を下限とする。しかしながら、図示した土器の中には、土師器杯A(1)、皿A(4)、須恵器杯B(13、15)、須恵器杯X(19)などのように明らかに先行する一群が含まれており、今後、さらに詳細な分析・検討が必要となる。

器種構成をみると、供膳形態では土師器・須恵器の杯・皿・高杯類、煮沸形態では土師器の甕、甗、韓甗、貯蔵形態では土師器の壺、須恵器の壺・瓶、甕類がともにみられ、出土比率が特定の器種にかたよる傾向は認められない。このほかに注目すべき遺物として、焼成前に

口縁部外面に「缶」とヘラ描きした須恵器壺、「×」状のヘラ描き、直径約6mmの竹管状の工具を使って円形にスタンプした須恵器のほか、製塩土器がある。

漆の貯蔵に用いた須恵器壺Kや漆使用時のパレットに用いた土師器杯や須恵器杯Bが茶灰色土層を中心としている。土器以外にも工房に関連する遺物が出土しており、これらは西隆寺造営前の宅地の性格を解明する手がかりとなる資料である。

なお、須恵器の中には土師器杯Aを模倣した杯C(6)、杯Cを模倣した杯X(19)のほかに土師器盤Aを模した盤Xがある。両工人グループ間の交流を具体的に物語る資料として興味深い。

陶磁器類には二彩釉の壺2個体分と白磁碗・青磁壺の小片が出土したが、これらは茶灰色土層より上層で出土したもので、西隆寺に関わる遺物と考えられる。

土製品にはミニチュアの須恵器杯A 1点、陶硯2点・須恵器杯B、杯B蓋を使用した転用硯7点、土馬6片、紡錘形の小型土錘2点がある。
(川越俊一)

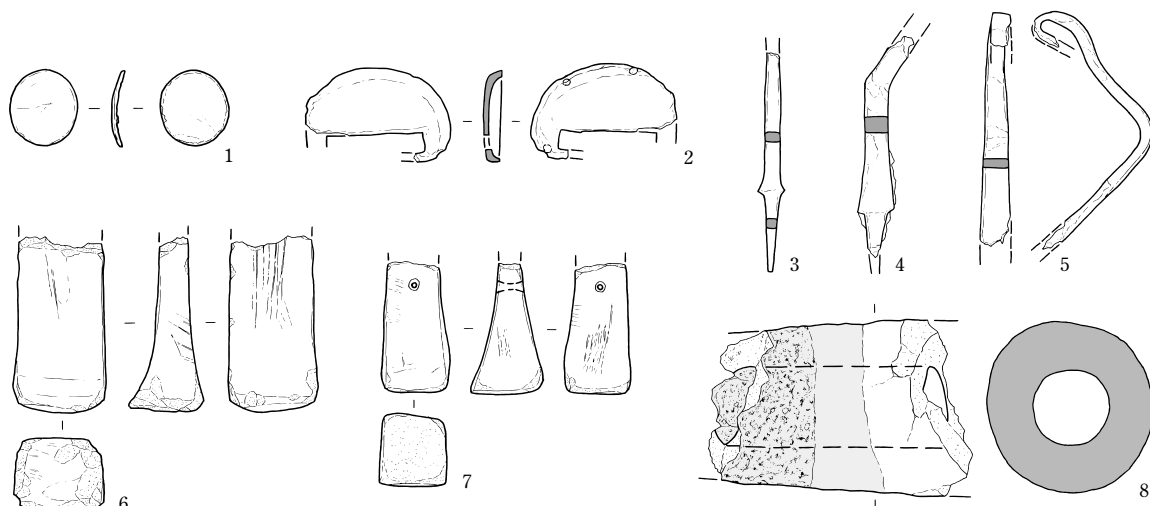


図161 第324次調査出土金属・石製品、鍛冶・鋳造関係遺物 (1~5 2:3, 6~8 1:3)

金属製品 遺物包含層および遺構から、銅鈐帶金具、銀円盤、鉄斧、鉄鎌、鉄釘が出土している (図162)。いずれも奈良時代の遺物である。

銀円盤(1)は径1.5cm、厚さ1mmで、わずかに湾曲している。凹面の縁辺には剥離した痕跡が残る。銅鈐帶金具(2)は丸軋の破片。全体に銹化が著しい。包含層出土。鉄鎌は2点出土している。長頸鎌の破片(3)は残存長4.3cm、重量0.93g。三角形の突起をもつ。包含層出土。長頸鎌の破片(4)は頸部で折れ曲がる。復元長4.6cm、重量2.75g。SK926出土。断面長方形の棒状品(5)は中央部と端部でくの字状に折れ曲がっている。復元長6.9cm。破損した鉄鎌の未製品の可能性もある。包含層出土。その他、多量の鉄釘がいくつかの遺構や包含層から出土している。

石製品 砥石が12点出土している。いずれも奈良時代のものと考えられる。砥石(6)は一部を欠いており、残存長5.9cm、最大幅3.6cm。長側の4面は使用による磨滅が著しい。残存する小口面にも使用痕が認められる。耕作溝出土。有孔砥石(7)は先端を一部欠いており、残存長5.2cm、最大幅2.7cm。直径0.5cmの孔を穿つ。表裏と両側面には使用による磨滅が認められるが、小口面には使用痕が認められない。回廊西側柱掘形出土。

鋳造・鍛冶関係遺物 遺物包含層および遺構から、ガラスつぼの破片が1点、銅滴が1点、轆羽口の破片が7点、鉄滓が16点出土している。轆羽口(8)は残存長9.8cm、最大径6.9cm、内孔径3.2cm。先端近くは薄灰色に溶解し、中央部付近は暗灰色に変色している。包含層出土。鉄滓は溝、土壌、包含層から合わせて約2.3kgと多量に出土している。これらの遺物の大半は西隆寺造営前の遺構や整地土から出土しており、付近に金属製作関連施設の存在が想定できる。

(豊島直博)

表20 西隆寺金堂・回廊座標

位置	X	Y	出典
金堂心	-145,110.80	-19,529.05	※
回廊北東隅心	-145,078.25	-19,490.30	※
回廊南東隅心 (推定)	-145,163.10	-19,490.05	
回廊南西隅心	-145,164.50	-19,567.15	

※『西隆寺発掘調査報告』1993 奈文研

まとめ

第320次調査では、下層(西隆寺造営以前)から、井戸や、付近に金属製作関連施設の存在をうかがわせる廃棄土坑などが見つかった。寺院造営には大量の銅・鉄製品が必要で、寺域内で工房関連遺物が出土する例も知られているが、今回検出した廃棄土坑は西隆寺造営以前にさかのぼり、西隆寺造営と結びつけることはできない。

上層(西隆寺期)では、巨大な柱を2本立てる、極めて特殊な掘立柱遺構を検出し、幢竿支柱か、門の可能性を考えたが、現状ではどちらとも決めがたい。いずれにせよ、これまでに例を見ない地下構造であり、今後の類例の増加を期待したい。

(清野孝之)

第324次調査では、金堂を取り囲む回廊の西南隅部を検出し、その位置と回廊基壇の外装・規模をはじめて明らかにした。外装は瓦の端面を見せる瓦積みであり、西隆寺内では東門から西に延びる2条の寺内築地の基底部と同様であった。また、端面の揃った位置が基壇端であり、基壇の出が5尺、基壇幅は26尺であった。さらに、回廊西南隅の位置は表20に示す通りであり、回廊の規模は心々で、東西260尺、南北286尺に復元できた。ただし、東面回廊は国土方眼に対してN 0°10'08" Wの振れをもっているが、南面回廊はW 1°02'25" Sのやや大きな振れをもっている。

今後の調査で回廊西北隅の位置が確定することを期待し、回廊の施工実態の解明は課題としたい。

(内田和伸)